

《福増寺簡介（かんかい・由来、の意味）

本日は、お参りいただきありがとうございます。



このお寺は「長壽山福増寺(ちょうじゅさん ふくぞうじ)」といい、群馬県渋川市赤城町津久田にあります。JR上越線敷島駅より、北方へ約200m、歩いて3分で参道入口に到着です。それではご案内いたしましょう。

参道入口より太鼓橋(たいこばし)を渡っていただくと、右手に「寓霊水(ぼんれいすい)」と呼ばれる湧き水があります。



昔から「夏は冷たく、冬は温かい」といわれる不思議な名水で、近年まで酒造りに使われていました。この霊水で手口を浄め、歩を進めてください。

はじめに目に入るのが大きな「青面金剛(しょうめんこんごう)の石像」です。昔、庚申(こうしん)信仰が盛んな時期があったようで、ところどころに講人が奉製した石仏類や献納品が見られます。

参道を登っていただくと、明治の頃植えられたという染井吉野(そめいよしの)の古木を見ることが出来ます。「山門の桜」と呼ばれて地元の人たちに愛されてきました。平成18年より保存再生事業に取り組んでいます。

坂を上ると山門頭(山門の前)に到ります。左右に並ぶ枝振りのみごとな十六本の松は、羅漢様現瑞(らかんさまげんずい)の姿を思わせるもので、「山門の羅漢松」と呼ばれて親しまれています。

右手にたたずむお地蔵様は、「子育て地蔵尊(じぞうそん)」で、子供の頭痛・腹痛等の病気快癒(かいゆ)、学業・稽古事(けいこごと)等の増進向上に効験があるとして信仰を集めています。由来は、

「昔、この付近に大きな椿(つばき)の木があって、その下にどこから来たか旅僧が住んでいた。日夜お経を読んだり托鉢(たくはつ)していたが、時には子供の遊び相手になりお守(もり)りなどをしてくれた。子供たちにその旅僧の功德(くどく)が及んで、大人になってから寄進(きしん)してくれるようになり、福増寺を建立できるようになったのだと。」のちにその旅僧を慕(した)って造られたのがこのお地蔵様と伝えられています。

「亀甲(きっこう)の石畳路」を踏みながら山門をぬけると、本堂・衆寮、経蔵、鐘楼などの七動伽藍(しちどうがらん)が建ち並んでいます。右に安置されている「三体の金剛仏(こんご



うぶつ)」は、西国(さいごく)、板東(ばんどう)、秩父(ちちぶ)の札所(ふだしょ)総巡礼の観音様です。大きな榎(かや)の木は「数珠つなぎの榎(かや)」と呼ばれています。



お寺の歴史を尋ねると、暦応3年(1338年)に草始し、江戸初期に現在の地に建立(こんりゅう)されました。開基(かいき)は狩野甚左衛門、開山は雙林寺(そうりんじ)より隠居(いんきょ)した雲峯闇悦(うんぼうぎんえつ・雙林寺14世、開山は正保4年(1647年))禅師(ぜんじ)と伝えられます。徳川家四代の家綱公の寄進や角田六郎兵衛の協力などにより、しだいに寺運が発展したといわれます。



寺名の由来は、お釈迦様の弟子に「福増」という人があり、「長寿」にして齢百二十で発心出家(ほっしんしゅっけ)したという故事(こじ)に因(ちな)んでいます。

それでは、本堂正面へ進んでお参りください。

これよりは、ささやかなもので手入れも行き届かず心苦しいのですが、教化の一環として、少しずつお庭の整備をしておりますので、折角のお参りですからご案内させていただきたいと思います。

左の方から履き物を脱いでお上がり下さい。

【方丈(ほうじょう)西庭】



ここに広がる庭園は、このほど築庭(ちくてい)されたもので、「非思量庭(ひしりょうてい)」- えもいわれぬのお庭 - と命名されました。子持山を借景(しゃっけい)に、ゆるやかな竹林の起伏(きふく)をおおう緑豊かな苔(こけ)地と、大海をあらわす白砂の処々に、八十数個の自然の景石が心地よく配される枯山水(かれさんすい)の庭園です。えもいわれぬ何かที่ただよっています。

「愛・地球博」の日本庭園の作庭、京都有名寺院の庭園などを手がけ、

日本の美を支える庭師として国の内外で活躍中の京都の庭師、北山安夫さんが、四季を通じて和んだり英気を養ってほしいと、当寺に滞在して作庭してくれました。

【書院東庭】

ここに広がる庭園は、「雲心水性庭」- さざれ石のお庭 - と通称しています。江戸期の「石組みを遺しています。築山(つきやま)の阜(さつき)は雲を、白砂は水を現します。中

中央の立石は、石灰質礫岩（せっかいしつれきがん）の一種、国歌に詠まれている「さざれ石」の分身で、岐阜県春日村より招来されました。その左には、「七福船」といわれる舟石があり、こちらに向かってくるようです。つまりは見る人に癒（いや）しと幸せがもたらされるように願ったお庭です。小学館発行の『日本庭園をゆく 23 関東の名園』に小さくですが紹介され、感激しています。



【方丈(ほうじょう)前庭】

ここに広がる庭園は、「埋憂庭(まいゆうてい)」 - まんまる月のお庭 - と通称しています。お参りの方が、憂いや悩みを平らな黒土の中に埋め、少しでも気分を楽にして前を向いて頑張りたいと願って作られています。正面の円い石を「円月相」と呼び、赤城山にかかるまんまるの月を模したもので、余（あま）ることなく欠くることのない円満な仏心を象徴しています。



手前の寓霊池には、蓮形（はすがた）の台が浮かんでいますが「華頂台（かちょうだい）」と呼び、ここに座ればお庭と同時に春には境内の桜が一望できます。満開時には、ライティングなどにより夜のあかり空間を觀賞いただいております。よろこびとむなしさのなかで和んでもらうことができれば、と思っています。

境内鐘楼（しょうろう）の洪鐘（こうしょう）は、戦時中に供出（きょうしゅつ）され、現在のものは昭和48年に戦艦陸奥（むつ）の部材で鑄造（ちゅうぞう）された、人類の平和と繁栄（はんえい）を祈る鐘です。古歌に「里寺の夕暮れ告ぐる鐘の音に行交ふ人も這いそぐらむ」と詠まれ、黄昏（たそがれ）の静寂（せいじゃく）を縫（ぬ）って殷々（いんいん）と鳴り響く当寺の晩鐘（ばんしょう）は、当地の風物（ふうぶつ）でもあったようです。

【洪鐘(こうしょう)】



以上、お参りいただき、どうもありがとうございました。